



タイトル 英国人記者が見た
連合国戦勝史観の虚妄

著者 ヘンリー・S・ストークス

出版社 祥伝社

発売日 2013年12月10日

ページ数 252 ページ

白人は日本が先の大戦で、西洋の覇権を覆すことによって、アジア・アフリカが解放されるまで、有色人種を人間以下の下等な存在と見下し、さげすんでいた。

トルーマン大統領は、広島、長崎に原爆を投下した直後に、笑みを浮かべながら、ホワイトハウスで閣僚に対して、「獣を相手にするときは、獣として扱わなければならない」と発言したことが、記録されている。このような態度は、トルーマンに限らず、欧米諸国民の圧倒的多数によって、共有されていたものだったと著者はいう。

著者は、滞日 50 年。「フィナンシャル・タイムズ」「ロンドン・タイムズ」「ニューヨーク・タイムズ」の各東京支局長を歴任した英国人大物記者である。

来日当時は戦勝国史観を疑うことなく信奉していた著者は、いかにして考え方を大転換させるに至ったのか、また、日本人はこの提言を受けて、どう行動すべきかを自分で考えなければならないと論じている。

早速、目次を見てみよう。

- 第1章 故郷イギリスで見たアメリカ軍の戦車
- 第2章 日本だけが戦争犯罪国家なのか？
- 第3章 三島由紀夫が死を賭して問うたもの
- 第4章 橋本市長の記者会見と慰安婦問題
- 第5章 蒋介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」
- 第6章 「英霊の声」とは何だったか
- 第7章 日本はアジアの希望の光
- 第8章 私が会ったアジアのリーダーたち
- 第9章 私の心に残る人
- 終章 日本人は日本を見直そう

章ごとに見てみると、さっそく読んでみたいと思う箇所がいくつかあるはずだ。第二次世界大戦の本当の戦争犯罪国家は何処だったのか？ 第二次世界大戦から既に情報戦が始まっていた！ すなわちサイバー戦争の前哨戦がすでに始まっていた。などなど興味が尽きない。

さて、気になるところを幾つか拾ってみよう。著者は日本軍が南京で大虐殺を行ったというアメリカや、ヨーロッパにおける通説を信じ込んでいた。日本に来て、日本とアジアの歴史を俯瞰（ふかん）し、そうした見方が大きな誤りであることに気付く著者なりに研究を始めたという。

ところが、日本の大新聞の記者や、大学教授や、外務省の幹部職員まで、多くの者が「南京大虐殺」が実際に行われたとあって、旧戦勝国の宣伝を未だに信じていることに驚く。

著者は、これが情報戦争におけるプロパガンダだ。その背景には、中国版のCIAが暗躍していたという。すなわち、中国の情報機関は、イギリスの日刊紙「マンチェスター・ガーディアン」中国特派員のH・J・ティンパーリーと、密接な関係を持っていた。

ティンパーリーは「戦争とは何か」と題する本を著して、南京の出来事を造り上げ、ニューヨークとロンドンで出版した。この本は当時、西洋知識人社会を震撼させたという。

すなわち、「ジャーナリストが現地の様子を目の当たりにした衝撃から書いた、客観的レポート」として受け入れられた。今では、国民党中央宣伝部という中国国民党の情報機関がその内容に、深く関与していたことが、明らかになっている。

ティンパーリーの本は、左翼書籍倶楽部から出版されたもので、その背後にはイギリス共産党やコミンテルンがあったという。この男、中国社会科学院の人名辞典にも登場し、それによれば、「盧溝橋事件後国民党政府により欧米に派遣され宣伝工作に従事し、続いて国民党中央宣伝部顧問に就任した」と記されている。

さらに、「中国国民党新聞政策の研究」の「南京事件」という項目には、次のような詳細な説明もある。

「日本軍の南京大虐殺の悪行が世界を震撼させた時、国際宣伝処はただちに当時南京にいた英国の「マンチェスター・ガーディアン」の記者のティンパーリーとアメリカの教授のスミスに宣伝刊行物「日軍暴行紀実」と「南京戦禍写真」を書いてもらい、この両書は一躍有名になったという。このように中国人自身は顔を出さずに手当を支払う等の方法で、・・・・・・・・」。

以下、「情報戦争における謀略宣伝だった南京」、「中央宣伝部に取り込まれた南京の欧米人たち」「南京大虐殺を世界に最初に報道した記者たち」「誰一人として殺人を目撃していない不思議」などの節を読み進めるにつれて驚愕の事実が明らかになる。

蒋介石や毛沢東は南京陥落後に、多くの演説を行っているが、一度も日本軍が南京で虐殺を行ったことに言及していない。つまり、「南京大虐殺」は欧米の記者や大学教授あるいはキリスト教の聖職者などによるでっち上げだったことが判明する。

「慰安婦」問題は、完全なナンセンスだ。なぜ「慰安婦」問題がこれほど俎上に上るの

か、理解できないと著者はいう。「邪悪な日本」というものを設定し、それを宣伝するプロパガンダ（謀略宣伝）になっている。

韓国の主張に対する説得力ある反論などを読めばこの問題も氷解する。曰く「もし女性たちが本当に日本軍に強制連行されたのであれば、誇り高い朝鮮人なら、老人も若者も激怒して決起し、どんな報復を受けようと日本軍に反旗を翻したであろう」。何もなかったということは、これが捏造であったことを意味している。

韓国人は劣等感を癒すために、日本を貶め、快哉を叫んでいるが、劣等感はネガティブなものだから、やがては韓国にとってマイナスに作用するだろうと著者はいう。

日韓、日中関係を歪めてきたのは、日本が卑屈になって、両国に必要以上に腰をかがめてきたことが原因だ。中国や韓国は、日本が反駁しないことをいいことに、プロパガンダに利用しているのである。

しかし、著者が声を大にして言っているのは、「南京」「靖国」「慰安婦」など、現在懸案になっている問題のほとんどは、「日本人の側から中国や韓国にけしかけて、問題にしてもらっている」というのが現実だという指摘である。



著者の指摘する「日本人」とは、お粗末なマスコミを指すが、彼らはそもそも、自分たちが日本という国家から「安全保障サービス」を供給されていることを理解していない。日々の「(自分の家族も含めた)暮らし」が、国家が提供する様々なサービスの上でしか成り立たないという事実を失念している。すなわち、彼等には「国家観」が無いのである。

だからこそ、「自分を含む日本国民の安全が脅かされている」状況にありながら、他人事のような記事を平気で書き、しかも近隣諸国には自分達自身が捏造した記事を書いて送り、さも国が発信したように、ご注進に及ぶのである。俗にいう「売国」である。それにしても、日本国内のリベラルと言われている連中の背信ぶりにはうんざりする。売国マスコミと言えば、みなさんご存じの朝日、毎日、時々NHKなどである。

これらのマスコミは、中国や北朝鮮などの外部の脅威勢力が日本の安全保障を弱めようとする基本構図には全く触れないで、日本政府を日本国民の敵のように位置づける。

彼らが持っている「国家イコール悪」という思想は、我々の日常生活を保障する秩序の維持が、国家という統治形態によってこそなされているのだという事実を忘れている。

彼等は、国家というものの存在意義や歴史的意味が分かっていないために、正義のよりどころをただひたすら「反国家」に求める。公共精神のかけらもない幼稚な連中だが、そういう幼稚な議論が結構通ってしまうところが日本の情けないところである。どうも、日本人の平均的な感覚には政治に対する切実感や理性的な判断力というものが伝統的に不足しているように思う。

本書で著者は東京裁判は不正きわまるものだったと憤っている。そして、「公正という、西洋が高らかに掲げてきた美德を、規範を、原則を葬り去って、裁判という名に値しない茶番劇」「フェア・プレーの精神を地に貶めて、欺瞞を貫いた」「裁かれるべきは、戦勝国

側だった」と断じている。

大東亜戦争（あえてこう書いておこう）は、日本の自衛のための戦いだった。それは戦後マッカーサーがアメリカに戻って議会で証言した「マッカーサー証言」によっても明らかだ。

しかし、マッカーサーはかつて「靖国神社」を軍国主義、国家主義の象徴だとみなし、焼き払ってドッグレース場を作ろうとしたそう。マッカーサーが考えを改めたのは、バチカン法王庁駐日使節だったプルノー・ビッテル神父が書簡を送って、「戦勝国か敗戦国かを問わず、国家の為に命を捧げた人に敬意を払うのは自然の法であり、国家にとって義務であり、権利でもある。もし、靖国神社を焼き払ったら犯罪行為であり、アメリカの歴史に不名誉極まる汚点を残す」と警告したからだそう。

もともと、「靖国を焼き払う」という犯罪行為を凌駕する歴史を覆すような不名誉極まる犯罪行為がアメリカによってなされたが、ここで記すことを控えよう。

著者は、日本は他のアジア諸国と違う。優れた民族だという。ユダヤ人と日本人は良く似ている。どちらも優秀だから、他の民族から嫉妬され、批判にさらされるという。

そのように日本を見るイギリス人がいるということは嬉しい限りだが、しかし間違っても、近隣諸国のように自分たちが「世界の中心」だなどと妄想しないことだ。他国のいいところは素早く読み取って、謙虚にそれを吸収し、自家薬籠中（じかやくろうちゅう）のものにする、これが日本の伝統的な得意技でもあるからだ。

また、日本がアジアを解放し、その高波がアフリカ大陸も洗って、今日の人種平等の世界が招き寄せられたが、日本が大戦を戦った結果として、人類史に全く新しい時代が開かれたと指摘している。それがなかったならばアメリカのオバマ大統領の誕生もなかったであろうと述べている。

戦勝国によって強いられた「実際には無かったことを、さもあつたと捏造する」歪んだ歴史観を悪用する近隣諸国の横暴ぶりに憤りを感じている人には是非本書を読んで欲しい。

しかし、いま国際社会で「南京大虐殺はなかった」と言えば、もうその人は相手にされない。ナチスのガス室を否定する人と同列に扱われることになる。これは厳粛な事実である。だから、慎重であらねばならない（この辺りは、附記を見て欲しい）。

とはいっても、日本が日本の立場で、世界に向けて訴え続けなければ、これは歴史的事実として確定されてしまう。日本はこれまでこうした努力が異常なまでに少なかった。日本は相手の都合を慮（おもんばか）ったり、阿諛追従（あゆついしょう）する必要はない。アメリカはアメリカの立場で、中国は中国の立場で、日本は日本の立場でものを言う。当然それらは食い違ふ。だが、それでいいのだ。従来のように、日本だけが物わかりのいい顔をしていたら、かつてがそうであったように、たちまち付けこまれてしまうからである。

本書は、日本人からの憤りでなく、イギリスの記者からみた控えめだがイギリス人らし

い憤りが伝わってくる。本書によって戦勝国によって強いられた、歪んだ歴史観を正すことが出来るだろう。日本人は、いまだに連合国がでっちあげた戦勝国史観の呪いから抜け出していない。著者が日本の視点でとらえた戦勝国史観は、日本人自身が自分を見直す良いチャンスを与えてくれるだろう。

本書は、平易で、読みやすいお薦めの良書である。

附記

なお、本書に加えて、「[日本自立のためのプーチン最強講義](#)：北野幸伯：集英社インターナショナル」もあわせて読んで欲しい。日本の進むべき正しい方向がはっきり見えてくるはずである。

2014.2.13